

(続紙 1)

| | | | |
|--|----------------|----|--------|
| 京都大学 | 博士 (人間・環境学) | 氏名 | 池田 あいの |
| 論文題目 | カフカとVolksmusik | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>本学位申請論文は、カフカ (1883-1924) 最晩年の作品『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』 (以下『ヨゼフィーネ』と略す) においてテーマとされている音楽と民族 (Volk) の問題を、カフカ自身が生きていた時代のプラハの音楽環境から見なおしていく試みである。</p> <p>序章では、この問題を探るにはカフカの遺稿を救って世に出したマックス・ブロート (1884-1968) の活動を見ていく必要があることが述べられる。ハプスブルク帝国の支配から脱するさい、プラハでは音楽が政治的にきわめて重要な役割を果たした。19世紀チェコほど民族運動が「国民音楽」と結びついて現われた例はない。この「国民音楽」の運動に関与してブロートは、いまだ無名だったモラビアの作曲家ヤナーチェクをヨーロッパの音楽界に紹介し、さらにその数多くのオペラ台本をドイツ語に翻訳するなどした。チェコ音楽の知識は、このブロートという友人を介してカフカにもたらされたのである。</p> <p>第一章では、19世紀プラハにおけるドイツ、チェコ両民族別のオペラ劇場興亡史と、そのなかでスメタナが「国民音楽の父」にされていく過程を詳査しながら、1911年のカフカの「小民族の文学」という概念の背後にあるのは、彼が体験したイディッシュ語劇における東ユダヤ人たちだけではないこと、スメタナの《売られた花嫁》へのカフカ自身の言及がそこに見られるように、「国民音楽」に結集するチェコ人たちもまた想定されていたことを指摘する。大民族に吸収されてしまわぬよう、「小民族の文学」にはその特徴として自分たちの文化を守るための「ナショナルで戦闘的な姿勢」があるという。しかし「国民音楽」を創ることに命を削ったスメタナ自身、Volkからの要求と自らの芸術的信念のあいだにジレンマをきたしており、《売られた花嫁》に熱狂するチェコ人聴衆のうちにカフカが看取るものも「国民という仮象」なのである。</p> <p>第二章では、ブロートのジャーナリストとしての活動を、その音楽批評を中心に見ていく。非音楽的であると自称するカフカはコンサートなどに足を運ぶことはあまりなかったが、友人ブロートの書くチェコ音楽批評は熱心に読んでいた。無名だった多くの才能を世に知らしめる彼の批評は、扱う対象の長所は余すところなく看取るものの、短所については必要となる場合にだけ注意を向ける種類のものだったため、鋭さに欠けるとして今ではほとんど参照されることはない。しかし、本論文は、1939年にナチスを避けパレスチナに移住した後のブロートの音楽的事績をも追究していき、パレスチナの地で彼が提唱した</p> | | | |

「イスラエル音楽」は、プラハで体験したスメタナ、ヤナーチェクの「国民音楽」を範と仰ぎつつ、イスラエル国家の建設にチェコ人の民族運動との類似性を見ようとするものであったことが示される。

第三章では、Volkにおける言語の問題として翻訳が扱われる。オペラは「国民音楽」の創造において最重要視されたジャンルであったが、それはまた翻訳がつきもののジャンルでもあった。世紀転換期のプラハでは、ナショナリズムをおし進めるチェコ人たちと支配階級であったドイツ人たちとの架け橋の役をユダヤ系作家たちが担ったが、とりわけ1910年ごろから彼らによるチェコ文化のドイツ語への翻訳・評論活動が活性化する。そうしたなかブロートの翻訳したヤナーチェクのオペラ《イエヌーフア》に対するカフカの批判を取り上げつつ、ブロートのそれとは違うカフカの微妙な翻訳観が論じられる。

第四章では、カフカ自ら遭遇して激しく反応したイディッシュ語劇の音楽が、民族のアイデンティティ表象の役割を果たす音楽ではなく、異種交配の絶え間なく繰り返される雑種音楽、いってみれば脱Volk化の音楽であったことが述べられる。カフカが見たイディッシュ語劇では、話の筋のうえでも音楽がこの世ならぬ力を持つものとして登場してくるケースが多いが、イディッシュ語劇体験後のカフカ作品には、音楽は動作と融合した「身体音楽」として姿を見せるようになる。申請者はこれを、イディッシュ語劇体験のすでに半年前に生じていたカフカのジャック＝ダルクローズ体験とも結びつけている。彼の独自の音楽教育法「リトミック」のメソッドに、カフカは深く共感していた。

第五章では、『ヨゼフィーネ』という作品が彼女と他のネズミ族のあいだの〈不理解〉を綴ることで出来上がっていることを指摘する。すでにスメタナにも自身の音楽とVolkのあいだに齟齬が認められたが、この物語の語り手はヨゼフィーネの歌に芸術的な素晴らしさなど認めようとはせず、自分たちVolkを結集させる点にのみその価値を認める。ヨゼフィーネの歌はチューチュー鳴きという「民族言語」を音楽に翻訳したものであるが、そうした彼女の歌を体験しているあいだだけはネズミ族もVolkの名のもとに自分たちが背負っている苦悩から解放される。このことは、ヤナーチェクがモラヴィア方言というローカルな言語の「発話旋律」を聴きとり、それを自身の音楽へと翻訳し、さらにその音楽がブロートの手で他言語に翻訳されても、彼独自の芸術性は失われることなく、民族主義的な文脈を超えた普遍性を得たことに対比される。何もかもにVolkの烙印が押される時代に、カフカは自らのVolksmusik体験を通じて、Volkを越えたところにある豊かな音楽の可能性を見出そうとしたのである。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、カフカ最晩年の作品『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』においてテーマとされる音楽と民族 (Volk) の問題を、カフカ自身が生きた時代のプラハの音楽環境から見直そうとする、他に類例を見ない試みである。ハプスブルク帝国の支配下にあったチェコ人が、チェコ民族として団結しチェコ国民になるという歴史的変革期にプラハで暮らしていたカフカが、当時のチェコ文化から受けた影響はこれまで十分明らかにされてはこなかった。本論文は当時のチェコ文化のまさに中核をなしていた音楽において、それを検討するものである。

19世紀から20世紀初頭にかけてのプラハにあって、それぞれの文化の砦としてドイツ人とチェコ人のあいだに繰り広げられたオペラ劇場をめぐる様々な角逐と盛衰の跡を追っていった第一章、また、第三章でのブルノにおける劇場事情についても、それらは現地に赴いて幾度もフィールドワークを行ってきた者にのみ可能な、手ごたえある筆致で描かれている。

カフカの友人ブロートの作家としての実績はすでにわが国でも紹介されていたが、音楽批評家としてのブロートの活動は、本論文第一章と第二章において初めて本格的に示されることになった。プラハ時代のブロートの事績が詳細に跡づけられているのは勿論であるが、シオニストとなった彼が1939年にパレスチナに移住した後の様々な活躍についても考察している。例えば、スメタナのために《売られた花嫁》の台本を書いたカレル・サビナは、急進デモクラットの秘密組織の主要メンバーにして且つオーストリア官憲のスパイの汚名を着て死ぬという問題的人物であったが、ブロートは花嫁を売るオペラの登場人物イエニークの姿と重ね合わせつつ、サビナ復権のための本をドイツの出版社から出している。このような指摘は、きわめて興味深いものである。

チェコ国民音楽としてのスメタナの《売られた花嫁》をカフカが自らの「小民族の文学」の概念と関わらせて述べていたことや、ヤナーチェクのオペラ台本のブロート訳にたいしてなされていたカフカのコメントなど、カフカ研究史上これまでついで注目されることのなかった重要なテキストが、ここでは申請者の当を得たテーマ設定によって生き生きと甦っている。

第三章では、翻訳という概念が実際的と比喩的の両様の意味で使われているため、ときとして論述に若干不分明なところが生じているが、そのことを差し引いても、それが言語だけでなく音楽における翻訳の問題にまで踏み込んでいった野心的な取り組みであることに疑いはない。

第四章では、1911年以後カフカの書くものに現われてくる不可思議な「身体音楽」のことが述べられているが、これまでこうしたものはただイディッシュ

語劇からの影響ということでは語られることがなかった。申請者はこれを、西欧の近代的身体を改変させるための運動を起こしたウィーン生まれのスイス人音楽教育家、ジャック＝ダルクローズのリトミック理論と関連づけて論じているが、これはこれまでのカフカ研究やカフカ評論において見過ごされてきたまったく新しい指摘である。

第五章で申請者は、作品『ヨゼフィーネ』そのものの読解という形をとりながら論全体を締め括ろうとしているが、必ずしもそれには成功していない。むしろ本学位申請論文の優れた点は、広範な文化史的脈絡のなかで『ヨゼフィーネ』という作品に現われた音楽とVolkの問題を探究している点にある。この点では、申請者自身の、チェコ語も読みこなすことができる能力と、音楽へのその深い造詣から、真に領域横断的な探究が可能となっている。また、カフカ最晩年の一作品を扱う形を取りながらも、カフカと音楽に関わる事柄の全てを究明しようとする熱意が端々から感じられ、事実それは成し遂げられている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成22年10月21日、論文内容とそれに関連する事項について口頭試問を行った結果、本論文を合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降